



## 故・安孫子岳晴先生を偲んで

会長 根岸 岳 萃

九月二十三日の早朝、副本部長、事務局長、地区長から、立て続けに電話が入り、安孫子本部長の訃報を聞き、唯々驚きました。

平成四年の県本部役員改選にあたり、県本部の将来に向って前進して行くには、この人以外にはないと率先推選し、又翌月の総本部の役員改選に於て理事に推され、岳院の将来に大いに期待した一人として、夢ではないかと驚き悲しむばかりです。

昭和六十一年、碩心会で松井岳洋先生の奥様の故郷寒河江に、サクランボ狩吟行を行なった時、同郷人として喜んで同行され、以来碩心会の吟友となり、当会の初吟会には毎年喜んで出席され、「碩心会の初吟会に出席して初めて新年を迎えた気分になる」と何時も言っていていられたことが、昨日の如くに思え、悲しい思い出となりました。

総本部の全国吟道大会の責任者として、又本部長として初めての神奈川地区大会の責任者として、職業をもちながらの激務による過

労かと胸の痛む毎日です。

誕生日が私と同じ八月で、八月は広島島の原爆、長崎の原爆、ソ聯の対日参戦、御巢鷹山日航機の墜落、そして八月十五日の敗戦記念日と八月はろくな月ではないなと、二人で笑って話した事など、懐かしくも、悲しい思い出となってしまいました。

年令は何才か私の方が先輩：出来得れば代ってやりたかったと思つています。とまれ、総本部も、県本部も故先生の意志を受け継ぎ、発展、前進することをお誓い致します。どうぞ安らかに眠り下さい。

## 故・安孫子先生の思い出

戸塚支部 鈴木 萃 岳

去る9月22日、安孫子先生は全く突然に黄泉の客とられました。わが碩心会からも、通夜から告別式にかけて多勢の方々が、遠い横浜新橋の観音禅寺まで歩を運んで下さり御苦勞様でした。

出棺の際、総本部理事長長谷川岳聖先生の「21世紀へ向って頑張つて貰う事を期待していたのに、誠に残念である。あの世で木村岳

風先生に現在の状況を報告して貰いたい」と語りかけるが如くの弔辞があり、生前のテブが流れ、木村岳風先生作「謹みて蕪詩一篇を霊前に供す」を全員で合吟しおわると、夏を惜しむ蟬の声が哀れむ様に鳴いておりました。

先生との出会いは、昭和48年戸塚教場開設の際、何かの名簿で先生の住所を知り、お電話をしたところ、心よく来て下され、「水戸八景」を吟じて下さいました。その時のテープも今は悲しい思い出となってしまいました。それ以来、色々な場所でお会いしましたが、思い出に残るのは、あの観音禅寺の新築祝い（昭和63年）の際、紋付き袴の正装でお祝いの詩を吟じて下され、梅田方丈さんとも親しくなり、そんなことで戒名に「吟道」の字が入ったのだと思います。

先生は地域の吟道にも大変尽くされました。「みなみ吟道会」をまとめあげ、泉区吟道連盟の顧問としても活躍されました。






偶然同じ菩提寺となり、先生を仰ぎながら吟道に生きてゆきたいと思ひます。

## 碩心会 秋季審査会終る

9月26日(日)逗子市立図書館ホールに於て右会が行なわれ、全員合格おめでとございました。

当日審査終了後の審査員の先生方の講評に「母音」についてのお話が出ましたので参考までに左記に記してみることになりました。

(母音)

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	→	ア	
ヰ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	→	イ	
ユ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	→	ウ	
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	→	エ	
ヨ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	→	オ	

堀内支部三十周年大会

## 会員結束のもと盛会に終る

9月19日(日)右会が長柄会館に於いて行なわれました。天気にも恵まれ、碩心会常任理事以上の先生方、葉山地区の各支部から二名づつの協賛を得て、盛会の裡に無事終了することができました。支部会員一同心から御礼申し上げます。

(堀内支部のあゆみ)

思うに昭和38年4月、支部第一号として、元町バス停そばの堀内消防団詰所の二階で五名から出発した堀内支部は、年毎に会員が増え、41年10月には教場を現堀内会館に移しました。その後更に会員増加に伴い、A・B・C班は堀内会館で、D班は中村教場、E班は白井教場、F班は矢島教場に分れ、それぞれ吟道に励んでおります。

主な行事としては、葉山町文化祭詩吟詩舞の会に参加、森戸神社に於ける元旦奉納吟、初吟会、納会とかかさず続行しております。今後支部全員が、一丸となって35周年に向って、益々発展の決意を胸にがんばってゆきたいと思えます。

岳愛

## 「方正学夫婦の箴」<sup>いましめ</sup>との出会い

中村 岳 郵

爽秋の一日、松井岳洋先生の墓前に詣る。整備された公園墓地は明るく眺めは最高、爽やかで実に心地よい。先生の墓前に来ると、何時も心が落ち付く。合掌してしばし心の中で現況報告。そしておもむろに取出したメモ、「方正学夫婦箴」を万感の想いをこめて、静かにゆっくり吟ずる。先生からのお言葉は得られないが、積年の想いが頭の中を去来する。「文正学夫婦箴」との出会いには、岳洋先生書の扁額で見事な隸書体に魅せられて、喰い入るように眺めたのがもう十数年前のこと…。詩文を読み取ることができず尋ねたところ、「夫は人として正しい行いをし、婦は素直に従うがよい。うちとけて仲睦まじければめでたく、しつくりしなければ災いにあう。夫婦は貧しくとも、お互いに尊敬しなければいけない。妻が出すぎている家は栄えない」とのこと。教訓詩として味わうべく、長詩ではないので符付して吟じたらよいでしょうと云われ、その気になったものの、我が頭脳では不可能、まして符付して先生に聞いて頂くん

て…

偶々9月25日の指導者講習会の日、子息松井正岳先生の意志により、蔵出しされた扁額をもとに、漢詩に造詣の深い宇都宮徳岳先生が詩文を研究解説、正岳先生が符付の研鑽に当り、その成果をもとに指導者一同勉強する機会を得、そして私も墓前に報告することができたのでした。

(紙面の都合上詩文は来月号に記載します)

## 涼州詞

王翰

葡萄の美酒夜光の杯

飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す

酔うて沙場に臥す君笑うこと莫れ

古来征戦幾人か回る

教本にあるので皆様よく知っている漢詩である。何年か前新聞に「陳舜臣」氏が、西域余聞と言う記事を連載したことがある。その時、涼州詞について書いているので、その中から少し参考になる文章を書いてみたいと思います。

涼州というのは現在の武威県の別名である。漢の武帝の時代に置かれた河西四郡(武威・

張掖・酒泉・敦煌)は、州で呼べば涼州・甘州・肅州・沙州であった。現在の甘肅省という地名は、甘州と肅州を併せてつくったものである。この地方に割拠した五つの小政權が、みな国号を「涼」とし、五涼と呼ばれた。

音楽好きであった唐の玄宗皇帝は、帝室歌舞団を梨園というところにつくった。梨園の弟子というのは、皇帝の弟子をも意味する。

日本で歌舞伎界のことを「梨園」と呼ぶのは、ここからきている。

甘肅地方の歌曲にあわせて、漢語の歌詞をつけたのが涼州詞であり、七言絶句の形になっている。

玄宗皇帝時代の地方官は、新しくめずらしい民歌民謡に、特に関心をもったのである。

曲が伝わると、次々に替え歌がつけられ、涼州詞も数多くつくられたが、そのなかの決定版ともいえるべきは、王翰の涼州詞であり、数多い涼州詞の代表とされたのは、やはり起句の「葡萄の美酒」のもつ魅力のためであろう。これから戦場へおもむこうとする兵士、砂漠、征戦という、その冒頭に「葡萄の美酒」をもってきたところに、この涼州詞の非凡さがある。

(山口記)

(住所変更)

48 荒木笙岳・横須賀市田浦大作町十六加藤方

☎〇四六八―六一―四九六八

(移 籍)

668 鈴木清子・一色Bより一色A支部へ

(入 会)

685 河田好枝 横浜市泉区岡津町一五九三―15

(真澄) ☎〇四五―八一―〇五〇六

686 久能義弘 横浜市神奈川区六角橋五―三一四

(真澄) ☎〇四五―四八一―六七一六

687 黒田慶子 横浜市旭区南希望が丘一二二―19

(真澄) ☎〇四五―三六三―三五九一

688 林田静子 横浜市戸塚区川上町三四五―六

(真澄) ☎〇四五―八二二―四八四五

689 小見波貴枝子 逗子市沼間四―三―三二

(一色B) ☎〇四六―八一―七一一六九〇〇

690 鹿嶋道子 葉山町長柄一四一―三―八二

(一色B) ☎〇四六―八一―七五―九四一〇

691 佐野ミサ子 葉山町上山口一四六三

(一色B) ☎〇四六―八一―七八―八三四八

(退 会)

66 関水滄岳(一色B) 83 矢島琴岳(一色B)